

「趣味と仕事がつながった！」 先端技術で野鳥を守る

熊本大学名誉教授

み た な が ひ さ
三田 長久さん(76歳)



鳥のさえずりを録音する三田さん

私とふるさと

当時通っていた
市立第五小学校は
教室が足りず、すし詰め状態でした。第一中
学校に入学し、2年生から新設の第三中学校
へ。グラウンドの一部がまだ田んぼだったた
め、体育の時間に土を運んだ覚えがあります。

大学院を修了した昭和47年まで成田町
に住んでいましたが、実家の兄も市外に
転居。30年近く寝屋川市に行っておりませ
ん。最近は地図アプリなどで様変わりした
香里園駅前などを見えています。

人工衛星で渡り鳥を追跡 送信機の超小型化に成功

京都大学時代からいろいろな趣味
に熱中。NTTの研究所に勤め、サイ
クリングにはまっていた41歳のとき
に野鳥と出会いました。週末に自転
車で埼玉県狭山市の自宅に近い湖を
訪れると、数多くのカモが飛来。「羽
の美しさにひかれ、図鑑を買って調べ
るうちに面白くなり、バードウォッチ
ングを楽しむようになりました。」

しばらくして日本野鳥の会からN

「世界の屋根」と呼ばれるヒマラヤ
山脈を飛び越えるアネハヅル。その
驚異的な渡りのルート解明のカギと
なった小型送信機を開発し、野鳥観
察の趣味が高じて仕事と結びついた
日々の研究を「本当に楽しくて仕方
ありませんでした」と振り返ります。

◇

TTに小型送信機の開発依頼があり
ました。渡り鳥を気象衛星で追跡し、
移動ルートを解明しようというので
す。ちょうど衛星通信の研究をし、
野鳥の会の会員だったこともあって
開発を任されたとき、「面白いことな
ったとワクワクしました。」

送信機は特殊なセンサーを搭載
し、布製のバンドで背中に装着しま
す。鳥の負担をなくすためにアンテナ
の形状を工夫したり知人の研究者に
専用の電子部品を設計してもらった
りして小型化に成功。「最初は300
gもあつた機器を25gまで軽量化で
きました」。さらにバンドの端を手術
用の糸で留め、半年ほどで切れて背中
の送信機が外れるようにしました。

オオワシなどのルート解明 野鳥の保護に生かす

平成7年2月、絶滅が心配される
オオワシの捕獲に同行。生息地の北
海道・根室市で氷点下20度にもなる
夜明け前から準備し、送信機の取り
付けにも立ち会いました。

9月にはモンゴルでアネハヅルを
放鳥。3500kmに及ぶ飛行ルート
の最後に立ちほだかるヒマラヤ山脈
を越え、「小さな体で空気が薄い80
00mの上空を飛んでインドまで南
下したのは驚きました」。気候が安
定する秋に付近を飛ぶ姿が登山者に
目撃されていました。ヒマラヤ越
えを初めて「線」でとらえ、「謎の多い
移動ルートや繁殖地が分かり、野鳥
の保護に役立っています。」

背中に小型発信機が
装着されたオオワシ



◀オオワシの調査に
参加する三田さん

NTT研究所から大学へ マルチメディアで野鳥調査

翌年春、教授として迎えられた熊
本大学では、マルチメディアを野鳥調
査に生かす研究に取り組みました。
例えば、音声認識技術を使い、鳴き声
で種類を識別するアプリを開発。「人
は趣味に没頭しているときに最大の
能力を発揮する」をモットーに、野鳥
に関わる研究を続けてきました。

熊本市の自宅周辺でも野鳥を観察
し、野鳥調査のNPO法人に種類な
どを定期的に報告。大学を定年退職
した今も続け、「全国に協力者がいる
ので、身近な野鳥の増減がよく分か
る貴重な記録になってきています」。
野鳥観察専門の海外ツアーにも参加。
「新型コロナウイルスの影響でしばらく行け
ませんでしたが、そろそろ再開しよ
うかなと思っています。」

※いずれも北海道(根室市)